

突如、流れ弾が頭上の岩肌に当り響きが谷間を走る。一瞬のためらいの後右側に山道を下りる。破壊家屋と火炎のための黒煙がたちこめ昼なお暗く瓦礫と岩間にこだまする銃声の中を進む。軍公路を真っ直ぐに走る歩兵部隊と別れ敵兵舎を抜け、九十九折れの岩路を進んだ。出会い頭に洞窟から敵兵二名両手を挙げ飛び出す。間隔を入れず銃弾で倒す。瓦礫を踏み分け岩角を廻れば数頭の支那馬の影。

午後三時すぎ、工兵隊の地雷除去作業の進捗を待ち指揮小隊は北門から紡績工場に向け引き帰す。その先頭にあつて約二十頭の支那馬の群をひき連れた奥村隊長の得意顔。戦果は大きい。

思えば六月、新堀河渡河以来泥濘と峻険の中を行軍、病魔と米軍機の銃撃により数多くの輓馬を倒し、乗馬を輓馬に替え、なお火砲一門の残置をやむなくした。中隊のみなが歓声に湧き凱歌をあげたことはいうまでもない。

他中隊の羨望に応じて戦果を分けあい、残余の捕獲馬に馬掛将校欄宜中尉の発案で桂奥・桂林・桂長・桂

崎・桂楡・桂原と中隊幹部の頭文字を名付けたのは桂林市街戦の硝煙消えた一週間後のことであつた。今にして思えば河南（信陽）から湖北へ、湖南から更に広西へ千数百キロに及ぶ大陸縦断、それはまさに空しいいばらの途であつた。

不幸な戦争を省みる

滋賀県 北川 次郎

私は昭和十五年の徴兵検査で、第二乙種となり、軍籍は第一補充兵でありました。在郷軍人として銃後の護りに頑張っており、本土空襲に備えて防空訓練が行われ、夜間の灯火管制は厳しく、少しでも野外へ灯が漏れていないよう訓練され、真っ暗闇でした。

農繁期になれば出征軍人の留守家族への手伝い、出征兵士の見送り等、何時かは私も応召される日が来ると覚悟をしている時、昭和十七年八月二十四日教育召集令状が届き、十月三日午前八時京都伏見区深草中部

第四十三部隊第二中隊（輜重隊）へ入隊すべしとの令状でありました。

百日間の教育です。当日は役場の兵事係の神屋さんの付き添いで営門をくぐり、初めての軍隊生活が始まりました。

翌日からラッパの音で跳ね起き、点呼、馴れない馬の手入れ、厳しい訓練が続きました。ようやく百日間の教育も無事に終り、十八年一月二十日召集解除で除隊の日です。中隊長の訓辞で「諸君は本日は教育召集解除で一旦除隊はするが何時臨時召集令状（赤紙）が行くかわからない。その覚悟で銃後の護りをせよ。」といわれ、落ち着かない日が続きました。

三月十八日正午頃、役場の吏員さんが「次郎さん来たぞなあ」と召集令状（赤紙）を持って来られ、「三月二十四日の午前八時京都伏見区中部第三十七部隊へ入隊です」と。覚悟はしていました。日本男子と生まれ、一度は野戦へ征き、お国に御奉公もしたいと思ひ、兵隊にもあこがれていましたがいよいよよとなること、留守中のことを思えば、年老いたる父、若き妻、一歳

に満たない長男、障害を持つ兄弟、気になることばかりです。

三月二十四日午前八時、中部第三十七部隊の営門をくぐり、無事身体検査も済み、翌日二十五日は軍装検査、新品の軍衣に身を固め、二十六日早朝、伏見を出発して堅田東洋紡績男子寮へ行軍、新品の軍靴で途中足には豆が出来て行軍のつらさを体験したことをいまだに記憶しています。

四月十九日夕刻堅田の皆さんに見送られ、大津駅より軍用列車に乗車して下関港より関釜連絡船で、朝鮮釜山港。四月二十一日朝上陸し、初めて見る朝鮮のハゲ山、お粗末な民家を眺めながら、貨物列車で一路中支派遣軍嵐六千二百十三部隊へと輸送されました。

約一週間の長い輸送の後、中国大陸を流れる揚子江沿岸浦口に到着し、目前に滔々と流れる揚子江を見て、小学校時代に教えてもらったことを思い出して中国大陸に來た感じがした。

揚子江を渡河して南京に上陸、私達の百九連隊は當時江岸警備の任務により、揚子江上流の東流に駐屯し

ており、その補充要員として追及したのです。五月六日は第二大隊（向井隊）は行李兵として、彭沢まで揚子江を朔り、方家嶺に到着しました。丘陵地帯にバック建ての兵舎、厩舎が建っており、夜になるとランプの灯、ドラム缶の風呂、いかにも野戦へ来た思いがしました。

部隊も七月に移動があり、湖口より一キロ程離れた三里街に駐屯することとなり、行軍により移動しました。十月には警備部隊から戦闘部隊となり、連隊行李に転入して、常德作戦に参加、はじめての間は毎日長距離行軍が続き馬と共の行動です。

常德に近づくにつれ、空襲もあり夜間の行軍から夜間の行動が多くなり、真暗な夜行軍には馬の尻尾に白い布を着け、それを目印としての行軍です。落後したら敵の捕虜となるので部隊から離れることは決してできません。毎夜の行軍で疲れると歩きながら眠ることもありました。

常德作戦では布上連隊長以下多くの犠牲者もでて、私と共に入隊した戦友も三名帰らぬ人となり、異国の

地に埋葬しました。追悼の念に堪えません。

一月武昌の南方油坊嶺に部隊は集結して次期作戦の準備となり、閩東方面出身の補充兵が到着して訓練を受け、私達の同年兵も兄貴顔が出来るようになり安心です。

四月二十二日部隊は湘桂作戦に参加すべく行動開始となり、毎日行軍が始り七月ごろに洞庭湖の湖岸浣江の近くで一ヵ月ほど駐留し、十月ごろ宝慶附近三塘沖で第一線の警備となり、毎夜歩哨の勤務に服しました。

二十年の正月は山の中の三塘沖で迎えました。最後の作戦となった芷江作戦は四月二十二日行動開始で山岳地帯の行軍が始まりました。この作戦は以前の戦いとは異なり、敵機の飛来も多く、昼間は休み、夜間の行動ばかり続きました。私達馬部隊は第一線の戦闘には参加しませんが、行軍中敵陣地よりの迫撃砲の砲弾、小銃弾が頭の上を飛び去り、敵機の投下した焼夷弾により一面火の海と化し、馬と兵三名共に焼死して谷間へ転げ落ちました。私の眼前の惨事でありました。

五月、敵も強く、やむ無く反転命令による退却となり、犠牲者も続出、負傷兵も歩けないものは手榴弾で自爆する者、部隊は玉砕寸前の危機に直面し、部隊長命令により私も重要書類を焼却し、残骸は深く埋没しました。五月十三日夕刻であった。幸いにも友軍の援護にて無事山門へ脱出でき、再び宝慶に集結しました。

八月十五日の終戦の報告を受けたのは二日程遅れてでありました。九月上旬より岳州の近く栄家湾まで行軍で退り、ここで武装解除となり全兵器返納して兵隊は丸裸となり、捕虜の身となりました。次第に食糧事情も悪化し、ただ帰還命令を待つばかりです。毎日使役に出て甘藷を民家よりもらって帰り、空腹を満たし生命を継ぎました。

ようやく二十一年四月になって移動命令が出て、武昌より漢口を経て北支廻りの列車輸送で上海に到着、六月中旬ごろ上海港より乗船、鹿兒島港へ上陸しました。本土の山が見えかけた時の感激は忘れることが出来ません。私は無事に帰還でき懐かしい故郷へ帰ることが出来ましたが、異国の地で青春の華と散った戦友

諸氏、本土空襲により犠牲となられた多くの人々、尊い生命を失われた方々の事を思えば、今日の平和を永遠にたもち、二度とこのような惨事の起こらないよう努めるのが私達に課せられた任務であります。

四十有余年の昔を省みて筆を執りました。

軍国主義の渦の中の人生

新潟県 宮野 甚之丞

私は専業農家の長男として明治三十一年生まれ、大事に育てられて同三十八年四月義務教育四年制度に一年生として入学した者です。

当時、日本は世界最大の大国ロシアに陸海軍とも大勝し、国中沸きに沸いておったときでした。新津から水原新道を凱旋兵が帰ってきたのを迎えた思い出があるのです。それからの日本は軍国主義の道を突き進んだのです。私はその後学制が六年制になり、農業は自給自足の時代でありましたので農林学校に学び、基礎